

| | |
|------------------|---|
| Title | 篠原一, 永井陽之助編 『現代政治学入門』 |
| Sub Title | H. Shinohara & Y. Nagai (eds.) : An introduction to the modern political science |
| Author | 内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1965 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.38, No.6 (1965. 6) ,p.136- 143 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 紹介と批評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19650615-0136 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

篠原 一編
永井陽之助

『現代政治学入門』

「近代」政治に対応したのが「近代政治学」であるとすれば「現代」のそれには「現代政治学」が対応しなければならぬ。その場合、「近代」と「現代」が、それぞれ特異な独立した歴史的现实であるとすれば、「近代政治学」から「現代政治学」は独立しなければならぬ。しかしながら、こうした歴史的特殊化は、歴史学の常識からしても成立しないし、「現代」は「近代」の連続体であり、その特性はむしろ、「近代」の属性の連続的拡大に確認されているのだから、「現代政治学」は編者のいうように「奇妙なことには、このモダン・ポリテイックスという語が何か一種特別のニュアンスをもつて使われているわりに、その内容の実体が何かという点になると、はなはだあいまいであり、それぞれ特定の政治学者のパーソナル・イメーヂを通じて、その内容が類推されているような気風すらある」(二四一頁)といった非体系的な、個人的認識論に定礎された提言となる傾向を当然もつている。

だからといって「現代政治学」は、「近代政治学」が政治的役割を集約的に担った市民階級の自負と抱負の理論的代弁者としての意義を培った、という意味での生命力を燃焼しつくした後に、近代政

治制度の形骸を絶対化したことから生じた政治的病理の臨床医としての役割をはたすのだということではない。この点にかんして編者が指摘した「現代政治学」なるものは、「現代政治学」の存在形態と存在理由を、まさに妥当に摘出しているといえる。すなわち、(一)かならずしも反マルクス主義ではないが、非マルクス主義的な政治学であること、(二)概念構成が経験的・操作的で、政治におけるイデオロギーや価値の機能を重視するが、ある一定のイデオロギーやドクトリンを前提として論理をたてないこと、(三)理論体系がつねに「開かれた」もので、人間行動に関する諸科学の発達と精密化に対応して理論が精緻化されるように、理論の枠組を作る努力をしていること(二四一—四二頁)、である。

「現代政治学」の共通した特性がこのように、非マルクス主義、非イデオロギー性、理論体系の開放性として認識されれば、最初へのべた「現代政治学」の非統一性が、容易に了解されるはずである。むしろそれは、方法の非統一性、分岐性によつて、その内容を豊かにするところに意義があり、またそこに期待がよせられるのである。しかもこうした方法の多元性は、学問的分裂、混沌に墮さないだけの契機によつて、方法的相対主義の水準を保ちうる。というのは、前述した共通の認識論にもとづき、「近代」に拘束され、規定された政治学が「現代」政治学であり、またたらんとするからである。しからば、こうした理論的対応の仕方は、どのような形で展開されているのか。しばらくは、執筆者たちの論旨を紹介することにしよう。

※

第一章「政治学とは何か」（永井陽之助執筆）は、「現代政治学」の次元を決定する座標軸の設定を試みた、まことに示唆にとむ部分である。永井氏は、「動物と神のみが、ポリス外的存在となりうる」のであつて、「神と動物の中間にあつて、上昇と下降の不断の緊張に生きざるをえない人間は、人間であるが故に、『政治』を必要とする」というアリストテレスの政治的認識が依然として正当であり、歴史的時点とは無関係に「政治 (Politics)」は、暴力の世界における自由人の最後の言葉なのである（二頁）と確認するところに、政治への決意をかためる。しかし自由人の最後の砦である政治は、あらゆる意味で「人間」によつて、この決意は常時確認された形で表明されてはいない。むしろそこには、最後の決意にふさわしくない非合理的世界が現出される。だからこの決意は、合理性の顕現への志向をたどり、「社会工学」として、技術官僚や行政官僚による社会問題への科学技術の適用への意志にたかまる。だが、政治が政治として存在することは、こうした決意の一面化で完結してしまふものではあるまい。

たしかに、「一定の社会で人間の無限の欲求に比べて、重要な社会的価値（資源）が稀少であることが社会公共問題の発生する基礎である」（三頁）ことに異論はないが、この場合に「稀少資源の合理的配分」の合理性に力点をおくと、政治はまさに社会工学の対象となつてしまふし、「エネルギーの入力（投入）と出力（産出）の比率（出力／入力）を極大化する効率（efficiency）」を追求する経済学の公

準「極大化原理」に等質の原理が、政治の行動原理として単純化されてしまふ。現代政治に要求される合理的側面はたしかに存在するし、現代政治学が「ゲームの理論」や「オペレーション・リサーチ」を組みこんだのも、こうした契機によるのだが、政治の世界に固有な非合理的側面、そしてそこから生ずる問題にたいして、こうした「合理性」はよく万能性を発揮できるのか。「それは解決ではなく、『回避』『無視』『折衝』『妥協』『抑止』『対決』の対象であり、いわば『波のり』のように永遠に終りなくつづく、弁証法的な不断の『克服』の対象でしかない」（四頁）として社会的紛争の意味がとられていくことが正しいのだから、「政治問題は、人間存在の地底からわき出る『紛争』であつて、本来、技術的・経済的合理性の尺度で処理するのに適さない領域に属する。それは分析と予測により、人間関係への深い理解と配慮をなによりも要求する」（四頁）と展開されるのは当然である。

政治問題にかんする認識は、この指摘で十分であるが、ここで「政治」は終わらない。まさに政治はここで認識の対象になりうる。すなわち、個々人の価値選択は無限の拡がりをもつという意味で政治問題が成立するのだが、政治には「なんらかの仕方で個人の価値選択の範囲を限定し、一定の方向へ収れんしていく契機がなければならぬ」（五六頁）。この契機が「人が人を動かす」勢力（インフルエンス）に発現され、「人間を動かすためのあらゆる手段を用いて、利益を統合していく錯雑龐大な通信と制御の過程」（六六頁）としての政治過程に集約される。そしてこの過程では、社会が近代化するにと

なつて、専門家としての政治家と一般市民の分化が、必然的に行なわれるから、政治とは、「古い慣習や伝統の力ではもはや利益の統合が不可能になる程度に、個人やグループの利益の分化が進行した社会において、単独者の恣意やイデオロギーや不当な実力行使によらず、不断の利益の調整を行なわねばならないところでは、どこでも必要となる人間活動であり、『わざ』である」(六頁)と規定できることになる。そして「現代」の巨大な政治社会現象である「巨視政治」は、集団政治現象として把握される「徹視政治」に「政治的なもの」のリアリティを理解した上で、よりよく認識されるという理論的架橋が成立する。

政治が定義されたが、その理解への手がかりは、状況、制度、組織の三水準に求めることができる。状況という接点は、人間が利益関心と価値志向をもつて環境に適応する場合に抱く課題意識によって認識された環境の意味的側面である。人間が抱く状況から、勢力関係、競争関係、権力関係がでてくる。制度の場合は、「その社会で正統と承認されている目標価値獲得の行動定型」(二〇頁)なのだから、アノミー、短絡反応といった制度的手続きの迂回性に耐えぬ行動、権威の問題、あるいは制度の有効機能条件などが、接点として理解対象となる。制度は「社会的価値の定型化であり、一定の価値志向を外的環境の要求に適合させる過程において自然発生的に成育していく『規範』である」が、組織は、「より作爲的・合目的で、もつぱら生産効率や管理効率の観点から、機能合理的に成員個人の役割を定型化する」(一一頁)水準でとらえられる接点であ

る。

前にもふれたところだが、市民の論理とエネルギーを担った近代政治学は、「個人が秩序の構想者または作爲的主体にふさわしいモラルと政治意識をもつ」(二三頁)ことを大前提としていたから、「政治哲学」、「政治機構論」、「政治史」は、それぞれの意義をもつており、しかも近代政治学の三位一体の体系として成立しなければならなかつた。だから永井氏の言をかりれば、「政治哲学が常識化するにつれて、政治学は、おのずと政治機構論を中心として発達し、状況のレベルでの政治意識論や組織のレベルでの政治組織論は、独立のジャンルとしての固有性をもたず、ともに『政治機構Ⅱ制度論』のなかに吸収されていた」(一三頁)状態から、マス・デモクラシーの展開とともに開幕され、政治化の時代として特徴づけられる「現代」政治世界が生ずるが、そこでは状況、制度、組織の三水準に政治の場が拡散し、また集中する点で、「近代」が展開されたのである。こうした「現代」性を担う現代政治学はだから、「状況・制度・組織の運動関係を理解し、現代の拡大された政治の場において、自らの主体性を回復するための、『自己認識の学』として成立する」(一四頁)契機をもつべき要請に応ずる態度を表明せざるをえなかつた。

こうした要請に対決する現代政治学のたたずまいは、その対象と方法に如実に発現するのは当然である。その場合に対象としてとり上げられるのは、「直接的には、現代の生きた政治現象であり、時々刻々変動する政治状況である」(一五頁)ことはいうまでもない

が、そうした事象が「象徴性」をおびていて、存在そのものと規定できないところに問題がある。「虚実の交错する薄明地帯」と表現されている場に生きていて、実を確認できる真正のリアリズムが、そこに要求されてくる。こうした「大衆」的な場において、三つの政治学が成立する。すなわち(一)「権力の師伝(助言者)としての政治学」、(二)「ドクトリンとしての政治学」、(三)「自己認識の学としての政治学」であり、そこでとられる方法は了解的方法と操作的方法として把握される。前者の前提は、「この世で人間は、人間的実存を共有しており、その限りで、未開人の行動も了解・納得できること、その了解を介しての消費者の説得可能性」であり、「人間行動の動機づけの『了解モデル』の造型と、それによる行動領域の予測が基礎になつている」(一九頁)。後者の方法論の前提は、「この現実には複雑な要因(変数)からなるが、その因果律の連鎖を完全に理解・認識することはできないこと、ただ有効な行動の制御(control)に必要な信頼性のある(量化できる)情報の獲得とその処理、そのため理論的モデル化が関心の中心になる」(二〇頁)点にある。しかしながら、この二つの方法論だけが現代政治学固有のものではなく、永井氏がF・ノイマンを引用しつつ説いている通り、「政治学は、固有の方法をもたず、ただ『支配と自由の弁証法的関係』という永遠の課題に対して、その時代におけるあらゆる科学を駆使して、アプローチしていくところに、その特色がある」(二二頁)。

第二章「政治意識」(永井陽之助執筆)は、さきのべた状況・制度・組織の連動関係理解の要因として、現代政治学的重要部分を担当す

る。すなわち政治意識は、「一般に、人びとが政治事象や特定の政治問題に対してもつ認識・評価・態度」の総称であるが、その意義は、「不完全情報下で政治的決定を行なうさい、外部からの情報を処理する基本的な「関係づけの枠組」を提供する」(二四頁)点に求められる。それは、ステレオタイプからイデオロギーまでの拡がりをもつのだが、それはまた「状況と象徴」によつて、構造的に決定されるから、「行動・イメージ・象徴」の過程で展開され、「意見・態度・イデオロギー」で「表象構造の内的な連関を数量的に把握することができる」(二九頁)。この間の論旨は、いくつかの図式化によつて明瞭に説述されており、術語の説明も巧みに包含されている。

そして、政治的思考様式として、(一)ステレオタイプの思考、(二)組織人的思考、(三)状況的思考、(四)弁証法的思考、(五)組織「政治意識の安定と変革」の項で、社会的価値の定型化によつて生ずる紛争の解決ではなく、沈黙としての不平不満からアノミー現象がとりあげられ、「現代の政治体制は、たえざる状況化をうちに含む不安定性を常態とする」(四二―四三頁)問題点が明らかにされる。

ここで提出された状況との対応の問題は、歴史的に「政治意識の諸類型」として、伝統的社会、近代社会、現代社会に探られるのだが、現代社会における政治意識の特徴としてとらえられた、(一)圧倒的多数の政治的無関心、(二)一九世紀的なモラライザーのもつていた「実力と情念のバランス」の崩壊、(三)政治参加の合理的な発条としての「自己利益」の死滅、(四)巨大な組織と機構に寄生し安住する一種の「機構信仰」の一般化(四八頁)の諸項目からなる現代的政治スタ

イルが、政治参加の様式によつて論ぜられる。

政治参加が個人のレベルで確認され、その点で意義を認めることに安住していた「近代」は、政治参加の成層化の「現代」において、また紛争の激化した「現代」において、参加からの逃走としての

「政治的無関心」に集約的に表現される。ラスウェルは、これを「無政治的態度、脱政治的態度、反政治的態度」として識別したが、「現代」はさらに、政治世界の組織化による個人の疎外感、あるいは国際政治への焦燥感に発端する「屈折的無関心」を重大争点として提出する。現代の政治意識のもつこうした特性は、現代政治のもつ潜在的危機に直接の連結性を有する点で、確認されねばならないのである。この問題は、「人民の選択」という象徴を有する選挙にどのような関連をもつて認識されるのだろうか。永井氏は、アメリカの大統領選挙におけるマス・コミュニケーションの登場による投票行動の組織者の問題を論じて、現代的選挙の意味を説き、さらに日本における現代的状況を論ずる。

前述した状況との対応から、第三章「政治的リーダーシップ」(高島通敏執筆)の問題がとりあげられる。導入部として「関係としての権力」概念が論ぜられ、こうした権力をもつ本質的な暴力性から実体としての権力への傾向が指摘される。ここに「服従」の問題が浮かびあがってくる。だから服従者の権力への自覚的、是認としての政治的権威が、政治権力との関連でのべられ、T・パーソンズの権力の零和概念と非零和概念が説明される意味がでてくる。しかしここでは、権力を本質的にとりあげる視点は回避され、支配とリ

ダーシップの「権力の作用」から論ぜられ、「リーダーシップとは、社会の一般構成員の支持という側面から、支配とは、一般構成員に対する地位の保持という側面から」(六八頁)の分析対象だと確認して、概念の整理がなされる。

「リーダーシップ論とその背景」では、この問題が古くて常に新しい点がありリーダーの資質論として政治思想的に語られ、状況の函数としてのリーダーシップ論が現代的に提出され、さらにリーダーシップと決定作成の関連についての視角が展開される。そして、リーダーシップの現在の課題が、(一)問題を特定化し同時にその解決方法を示し、(二)課題はすでに大衆の間に潜在的に感じとられているものの組織化として現われねばならない、(三)課題の提示とは、当然、課題と対応策を大衆に積極的にアピールし納得させる過程をふくむ(七五―六頁)、として設定され、この課題の提示と政治社会の状況との関連から、伝統的リーダーシップ、代表的(制度的)リーダーシップ、投機的リーダーシップ、創造的リーダーシップの類型化が行なわれる。ここでの検討から、「指導とは、課題の提示という形式の下に、大衆の服従を調達しつつ、指導者としての自己の地位を確保する、支配の一方法としての色彩を、第一義的に帯びる」(八二頁)ことが確認され、その過程で集約的に現われる技術として、認識の操作、争点の操作、解決の操作、「頭教と密教」として表現されるリーダーシップ集団の二重構造化、がとりあげられる。「一体感の培養」がリーダーシップにおける要因として論ぜられるのも、こうした指導者と大衆の分化を基調とした「現代」の最も尖鋭

な問題点だからである。最後に、現代社会とリーダーシップが総括的にとり上げられ、カリスマの指導者の意義の減退から、さきあげたリーダーシップの諸類型の問題がのべられ、投機的リーダーシップへの危機が指摘される。

かつて、E・バーカーが「集団の噴出」を現代の問題として指摘したが、この問題点は第四章「政治過程における集団化」に集結される。第一節「官僚制」（渡辺保男執筆）、第二節「政党と圧力団体」（田口富久執筆）にかんしては、すでに現代政治学的な業績があるので、ここではとくに省略する。第三節「マス・コミュニケーションの政治的機能」（辻村明執筆）は、政治学体系に組みこまざるべくして、比較的独立したコミュニケーション、科学として発達してきた部分だけに、大きな意義を本書にあたえる部分である。辻村氏は、正機能、逆機能、没機能、能を機能類型として識別し、さらに意図と結果との対応関係から顕在的機能と潜在的機能を認識する。さらに、権力の上昇過程と下降過程を想定した場合のマス・コミュニケーションの顕在的機能が論ぜられるが、むしろ問題なのは潜在的機能である。その理解のために、マス・コミュニケーションと政治権力との関係、すなわち「マス・コミの政治的距離」が、独裁政治、自由主義政治の諸国を具体的に観察し、制度的な側面での距離を念頭において、潜在的機能の比較基準として、(一)マス・コミのあり方を根本的に規定してくるイデオロギーないし基本的考え方、(二)逆機能、(三)マス・コミとパーソナル・コミュニケーションとの関係、をあげて、アメリカとソ連、および日本が論ぜられる。最

後に、アップ・ツ・デートの問題である「後進国の近代化とマス・コミ」も抜かりなく論ぜられている点はまことに親切である。

第五章「国際政治への展望」（武者小路公秀執筆）では、これまでの諸章での論述から「国内政治の仕組についてのイメージができた上で、その外枠をなしている国際政治の問題」（二六九頁）に必然的に発展する現代政治学の理論的拡がり論ぜられる。すなわち、国内政治に包含されているイメージやシンボルが国際的な目標や価値に連動したり、国家指導者が、国際的な代表機能を担当したり、あるいはまた国内政治過程に所属する集団が国際的なかわりを持つことによつて、国内政治は常に国際政治に連結される側面をもつ現代的意義がとらえられるのである。もちろん、国際政治学のABCである国際政治における確定された権力機構の欠如から、国際政治における基本的過程は、「最終的には、暴力を合法的に使用することのできるこれらの各社会へ各国の権力機構の間の取引、協力、紛争という形で展開される」（一七一頁）ことに認識されるのだが、それを担う主体は、象徴された国家と実質である個人ないしグループとしての政策決定者の組み合わせである。この観点にたれば、「国際政策決定の国内的条件として、……リーダーとしての政策決定者の問題、国際問題に対する世論と政治意識の問題、政策決定における政治過程、官僚制、軍隊などから、政党、圧力団体の問題まで、みな関連してくる」（一七四頁）と指摘されるように、現代政治学の一翼を担う国際政治理解への学問的関心の一貫性が明確になる。国際的環境にあつて主体は、自分に有利な状態に国際環境を変え

ようと努力するが、その際、大きな役割を演ずるのは、主体による状況、規定の問題としてのイメージである。その場合のイメージは、価値評価によつたラベルⅡイメージとして機能するのだが、この「望ましい」、「望ましくない」ラベルは、決定論的機能を与えられる場合にイメージの制度化、非常に不確実な機能の場合、状況化する。制度化した国際状況のイメージに基づく政策決定の許容範囲は、有限であり、制度化が進めば、その幅は狭くなるにしても、こちら側の主体のでかたに應ずる相手方のでかたの関係が、国際関係として理解されることには変りがない。その関係の考え方は、たとえば「ゲーム」として展開されるのだが、その関係を担う二主体のもつイメージが制度化され、またルールの制度化によつて関係が安定することから、さらに二主体以上の場合の問題が論ぜられる。ここで「役割」によつて構成される「社会体系」概念が導入され、国際関係は「国際体系」として理解対象にとらえられる。そして、(一)勢力均衡体系、(二)ゆるやかな分極体系、(三)固い分極体系、(四)普遍的体系、(五)階序型体系、(六)学位拒否権体系、の六類型が国際体系に見いだされ(一九二頁)、(一)(二)および両者の混合体系としての多中心体系が論述される。そして、すぐれて現代的な問題として同盟からブロックへの問題に言及され、「安全共同体」をめぐつて、国際政治から国内政治への回帰が展開され、「国際政治のダイナミックス」は、ゲーム論的状况の中から組織化への傾向が生じたり、……また、組織化への傾向がゲーム論的状况に影響をおよぼす……という形で、展開されていく(一九七—一九八頁)と確認される。

第六章「むすび——政治と市民」(篠原一執筆)は、現代政治がいかにかに「組織された暴力として、醜悪な側面を露呈する」(一九九頁)にしても、「政治ないし政治の安定・進歩ほど、プロフェッショナルとしての政治家ないしその組織と、アマチュアとしての市民ないしその集団が相互に機能し合うことを前提にしているものはない」(二〇〇頁)のだから、この基本前提を蘇生するため、政治の安定と市民の役割が考察される。その導入部として、二大政党制と多数党制がとり上げられ、「政治と市民の存在形態とが密接な関係にあること」を明らかにしつつも、こうした「形態」論から政治のあり方全体に言及することの無意味さも指摘される。だから、「政治の安定と進歩、およびそれとの関係における市民の役割を考えるにあたっては、政治の諸要素を包含するという意味で包括的であるとともに、しかもプロフェッショナルとアマチュアとの役割が明示されるような図式」(二〇三頁)の必要に應ずる試みとしても、イーストンの政治体系図式と、その修正図式が提出される。この政治体系図式は、入力と出力を基本概念としているが、 $入力 \nabla 出力$ 、 $入力 \wedge 出力$ 、 $入力 = 出力$ の三項にそれぞれ、アナキー、独裁制、安定体制が理解される。また入力、出力を支える政治文化概念からの図式化も紹介される。

一般論として展開された右の論旨は、市民の水準での論議でさらに充実される。その場合、現代の市民は、シャツツシュナイダーの指摘した「半主権的人民」であるとすの認識を受け入れ、政治的市民の行動基準として、「市民としては、一つの問題に対して複数の

政策・選択肢が提供されていることを認識し、それに対して固定したイデオロギーにとらわれることなく、そのプラス、マイナスを冷静に判定し、その中でもつとも多くのプラスをもち、マイナスのものもつとも少ない政策をえらぶことができる能力があれば、十分ということになる」(二〇七頁)として、現代的に創造的な市民像が提出される。その底には、「政治には奇蹟はない。ひとびとが断念と諦観なしに努力するときはじめて、政治社会は光明を見出す」とする信条が脈々と流れている。

※

教室で現代政治学を論ずるさいに、学生の表明するとまどいに苦しむ経験をもつた者は多いだろう。それは、学生の政治学的知識を、制度論的教養から、現代政治学的水準に架橋できるように手がかりを与えるにたる教科書の欠如に重大な理由があつたといえる。

この種のとまどいは、学生ばかりでなく研究者間にも存在しているし、だから「現代政治学」者は、仲間として孤立した存在になる傾向があつた。政治学の伝統を固執するものが、現代政治学に関心は示しても、こちらの側では、それを満足させるだけの説明を加えるだけのゆとりはなかつた。本書が、この種のへだたりを埋める点で想像できる意義はきわめて大きいと確信できる。編者の「研究者の共有財産は広く一般の知識に転化さるべきであらう」(二四三頁、傍点―内山)という基本的態度は、積極的に肯定されるはずである。

昭和三十七年に秋永肇教授が「現代政治学」(富士書店)を公刊さ

れて、現代政治学の理論史的、解說的を丹念な形でなされたのだが、本書ではむしろ現代政治学の理解的側面が、学説の紹介としてではなく、執筆者の「政治」体系の下に展開されていることは、現代政治学の「現代性」を明らかにして余すところがない。また、政治哲学、政治機構論、政治史の近代政治学的三位一体性が崩壊した後、それを継いだ現代政治学が、「歴史主義」を拒否し、制度論から過程論に力点を移したことで学問的志向づけをしたことは確かでも、その均衡―静態論的性格を打破すべき点にまで到達していることは否めない。この観点からすると、たとえばS・N・アイゼンシュタット等の追求している「変動の制度化」理論や、現代政治学的な歴史理解の方法である「近代化」理論の問題などが包摂され、またより以上に論ぜられていたら、と考えるのは、欲ばりすぎるかどうか。

ともあれ、本書によつて、わが国における政治学と政治学教育は、変わつてくることが期待されるし、現代政治学を知らないはずまされない状態が生れるであらう。執筆者諸氏の労を心からねぎらうものである。(有斐閣刊 二五五頁 昭和四十年三月三十日発行 定価四二〇円)

——一九六五・四・十五—— (内山 秀夫)